

兵庫県立 人と自然の博物館

# 知識と知恵をつなげて広げる「ひとはく」

中間 真一  
HRI 社会研究部



人と自然の博物館（ひとはく）は、兵庫県下の自然史を中心とするが、それだけではない。人と自然の関わりを大切なテーマとしている。積極的なセミナーやネットワーキングの展開は、生涯を通じた学びの場として、ナチュラリスト心を育み、支援している。

## 「ひとはく」のダイナミズム

人と自然の博物館（ひとはく）は、館内に兵庫県立大学の自然・環境科学研究所を設け、この規模の博物館としては、幅広いジャンルの、高い専門性を持った研究スタッフをそろえているところにも特徴がある。

これらの豊富な人材を活かして実施する、年間200種、300コマにも及ぶセミナーは、座学、実験・技術、ホビー、アウトドア・スクール、ナチュラル・リソース・マネジメントの5つのジャンルに分けられ、さらに、小学生向けから大人まで、それぞれに合わせた内容をそろえている。展示中心の受け身の博物館とは一線を画す証左といえる。これらのセミナー参加者は年間5000名を超え（03年度）、セミナーへの参加は、近隣の単位制高校の単位としても認められる。

さらに、企業や兵庫県下自治体からの受託研究を行うシンクタンク機能も充実し、受け身の姿勢を感じさせない。このようなダイナミズムを支えるのは、館のスタッフと、ボランティアの方々、そし

て地域の人々によるところが大きいようだ。文字通り、「ひとはく」なのだ。

## 博学連携へのこだわり

スクールパートナーシップ事業は、総合的な学習の時間や理科・生物・地学・環境などの教科において、学校教員と博物館（研究員）が相互に持っている資源を活用しあう「博（博物館）学（校）連携」の取り組みだ。博物館のスタッフが、一方的に直接指導してしまうと、手間はかかるが単発的なイベントに終わってしまう。だから、互いに「何ができるのか」を協議し、具体的なテーマと授業方針を検討し、学習プログラムを共同開発する。そして、学校の先生が博物館を活用しながら生徒に教える。

連携を制度化して一気に広げるのではなく、あくまでも希望する学校とともにじっくりつくり込む、この手づくりのやり方が功を奏し、連携の成果は着実に広がりつつあるという。

さらに、県内各地に向向して行うキャラバン事業、ひとはくがやってくる「はより地域生活の中の自然に近づきながら、展示とセミナーをセットにして展開する取り組みだ。04年度も13市町18カ所で開催され、学校での開催も多い。そし

て、ここでも基本となるのは、地域と博物館が相互に知恵を出しあい、あくまでも地域主体で企画し、実施するというやり方だ。博物館の展示を小出しにして展示するようなキャラバンではない。あくまでも、連携という意味を大切にする姿勢がうかがえる。

## 点を面に広げるe 連携

インターネットを活用した博学連携のスタイルも興味深い。県内8校をネットでつないで1年間の長期にわたって取り組まれた00年度の「ハチの生態調査」や、最近では、校区や周辺地域の街路樹や雑木林の木の調査、近隣を流れる川の生き物たちの調査など、テレビ会議やインターネットというテレコミュニケーション技術をつましく利用して、効果的な学び

のバーチャル・コミュニケーション形成を成功させている。自分たちだけでは、広い県内の一点の情報にしかないが、同じ調査を県内各地で同時に継続的に進めることにより、生き物の様子が点でなく面としてとらえられるようになることを、小学生の子どもたちも実感している。

## 着実に広がる学びのネットワーク

博物館が持つ高い専門性と知識集積、学校や地域が持つ高い関心と教え伝える能力、これら互いの得意技を持ち寄って進める連携こそ、これからの学びの場に必要とされる連携だろう。これが、単に博学連携にとどまらず、博・学・社・産につながって、科学を学ぶネットワークに発展していけば、すばらしい。



## ナチュラリストの心と態度は自然の中から手わざで学び取る

インタビュー

田原 直樹さん

兵庫県立大学 教授  
兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員



地域の教育力が弱くなり、子どもたちの学びの場が、学校に集中していく傾向がありますね。

そもそも、環境に関する知識というものは、自然の中で、子どもたち同士の遊びの中や、身近な大人から学んでいたものでしょう。学校という場は、もともとそれを教えるという役割を担ってこなかったはず。子どもたちは日常生活の中で、知らぬ間に身につけた知識の上に学校で教わる知識を重ね、自然や環境について理解していったわけです。

しかし、いまの子どもたちの生活環境は、地域からも自然環境からも、切り離されてしまっています。だから彼らにとって、自然のことはもともと知らないのが当然なのです。自然環境のことは学校で勉強することだと思込んでいます。

学校ではビオトープづくりなどの方法も広がってきています。

私はビオトープだけでこの問題を解決

できると安心してはいけないと思うのです。なぜなら、そもそも子どもたちは多様な自然のあり方そのままに接して、そこからさまざまなことを学んでいたはずだからです。ビオトープは、多様な自然の状態の中からエキスを抽出して、学習に適するように再配置したものです。これで自然がわかったと思ってしまうのは、ちょっと危ない。

自然から学ぶという点において、学校という学びの場は、子どもたちに教材を提供する存在ではなかったはず。自然の中の雑多な知識を、科学的な枠組みで理解し直すために、重要な役割を果たしてきたのが学校であつたわけです。ですから、これまで地域社会や自然環境が果たしてきた役割を、すべて学校の中に取り込もうとするのは、かなり無理があることだと思えます。

決して、学校というシステムそのものが悪いわけではありません。学校だけが教

育的な役割を担っている現在の状況が問題だと言いたいのです。教育に関するすべてのことを学校に期待し、役割を押しつけるのではなく、知識や能力を広く高めるという、学校本来の役割を活かす文脈から、必要な社会支援を考え、実行すべきだと言いたいわけです。

そこに、博物館が担うべき、学校への支援という役割が出てくるわけですね。

学校の先生方の、教育者としての人間性やスキルは、かなり高いと実感しています。見知らぬ大人である博物館の学芸員が子どもたちに接するよりも、ずっと高い教育力を持っていることは確かです。ですから、この博物館でも、さまざまな学校教育への支援を行っています。が、学校の授業の代わりに博物館のスタッフが果たすというやり方は、ほとんど取りません。

その代わり、学校の先生が博物館を活用した指導をすることを想定して、ある種のインタープリテーションのプログラムを用意し、教職員セミナーも始めました。しかし、それをパッケージ化して県内の学校の先生たち全員に普及しようと



いうようなことは、結果的に効果的ではないと思っけています。その学校、地域、先生に合わせた個別対応が、手間はかかるように見えても、着実な成果に結びつきます。

科学や技術への興味は「手わざ」から

理科教育のもう一つの側面である、科学や技術に対する子どもたちの興味が薄れてきていることも問題とされています。

技術については、子どもたちが日常的に接する社会の中で、「手わざ」に接することが失われてしまっていることに原因があると考えています。子どもたちが、手づくりのものを日常的に使うことも、ものづくりをしている人を見ることも少なくなっている。また、自分の手を動かして技を身につければ、すごいことができそうだと感じるチャンスも、身の回りにほとんどないのが、子どもたちが生活するハイテク社会の現実でしょう。

私が子どもの頃に夢中になっていたアマチュア無線では、真空管をつまぐ組み上げることが重要で、その技術力や工夫が明らかに結果に表れるものでした。ですから、いま自分がやっている手わざを磨いていけば、その先には名人芸ともいえる技があるのだという、到達イメージ

その他の来館者を軽んじてしまうと大きな問題です。すそ野を広げて登りやすくするとともに、高度な知的関心にも対応できなくてはなりません。

学びのすそ野を広げてさまざまな登り方を用意し、わくわくしながら高い頂上をめざす。博物館は、学びの登山ガイドのようですね。

あまり社会的に認知も評価もされていませんが、博物館は、個別の研究分野の専門家を育てる人材育成機関でもありません。博物館の「大学院」に通いながら、今西錦司のような、あるいは、ノーベル賞に匹敵するような賞を受賞するレベルの研究者を輩出することができれば、それはすばらしいことです。

ある昆虫少年の高校生は、当館の昆虫学ハイスクールというセミナーを受講しながら、ある学芸員を目標として、生きものに関わる将来への進路を描いているようです。この夏のボルネオジャングル体験スクールでは、一人の高校生が、生物に関わる進学の決意表明をして、現地サバ大学の教授たちから喝采を受けていました。こういって若い人たちの将来が楽しみです。

また、「キャラバン事業」と称して、県内各地でさまざまな展示やセミナーなどを開催しています。このキャラバンは、

や先への期待が具体的に感じられませんでした。こういう環境を取り戻せないと、高度化してブラックボックス化する一方の技術への興味を、子どもたちに湧き起こさせるのは難しい。

一方、自然の中やローテクの分野では、まだまだ手わざの領域がたくさんあります。たとえば、博物館では子どもたちとボルネオのジャングルで昆虫採集を行います。すると、昆虫のいる場所をよく知っていて、虫取り網を上手に扱って学芸員は、その手わざを持つがゆえに、あざやかな網さばきで虫を捕らえ、子どもたちからの尊敬のまなざしを浴びています。ロボットスクールのような取り組みでも同様。組み立てや簡単なプログラミングがある種の手わざとなります。ちょっとした工夫による細工が、できあがったときに大きな差として表れてしまうのを思い知るのです。

子どもたちは、優れた手わざに対して素直にあこがれます。子どもたちの自然や科学技術への興味は、「手わざ」を持った大人にかかっているのかもしれない。多様な人々の学びを支える場

大人の側の問題になりましたが、博物館は子どもたちの学びに限った場ではありません

パッケージ化された移動展示ではありません。それぞれの開催場所で、活動の中心となるパートナーを見つけ、博物館と地域とが共に作り上げるといふ形態をとっています。そのため、事業の内容は、人により、地域によってそれぞれ異なります。担当者の苦労は膨大なものとなります。しかし、博物館と共に活動してくれる市民を育てるといふ、大きな価値を認識して進めています。

博物館のパートナーであり、事実上、友の会組織の役割も果たしているNPO法人「人と自然の会」の会員も、博物館にとって大切なゲストであるだけでなく、会員自身がホストとしての素晴らしき能力と意識を持っています。すでに、博物館スタッフでは成し得ない大きな成果を上げています。単に目先の集客にとらわれることなく、博物館の利用者や地域の人々がパートナーとして活躍してもらえらるような姿をめざして取り組むことが、学びの場の広がりとして結びつくと思っています。

学びのネットワークコアを担う

そうなると、地域内に学びの場のネットワークが張り巡らされるわけですね。連携はとても大切です。自然科学の分

ん。大人の学びの場でもあるわけですね

いま、生涯学習というと、暇のある人たちが、趣味的に受講しているという感じを否めません。しかし、それは本来の生涯学習ではない。子どもから大人まで、すべての市民のライフステージを対象として、それぞれのステージに求められる学びの場として、「生涯学習」の枠組みを設定できればと思っています。そのような生涯を通じた学習の枠組みに基づけば、「学校教育」というものがどのように位置づけられるか、自ずと明らかになるはずですね。

そうすれば、博物館は子どもたちにとっては学校という学びの場とは別の、もう一つの学びの場となる。そして、大人にとってはある種の大学院のようなものになり得るのではないかと考えています。そうすると、博物館の来館者の知識レベルも、まったくの素人から、かなりのマニアまでカバーしなくてはなりません。

自然科学系の博物館の中には、友の会などの組織に、昆虫などに詳しいマニアが入り込んでいるところが多いです。そして、このような人々を、活動対象の中心としてとらえている館もあります。確かにマニア層への対応は重要で、学芸員としても知的刺激を得られますが、「ファンサービス」に徹しすぎてしまい、

野は幅が広く、また、対象としている兵庫県という場も地理的にかなり広く、多様な要素を持っています。ですから、博物館の内部スタッフだけでできる活動には限界があります。そのため、たとえば西はりま天文台と連携して、向こうで展示をしたり、逆に天文台の企画による展示や事業をこちらで展開したこともありました。すると、活動の幅は広がりました。すると、活動の幅は広がり、自身もますます充実します。こうした事業連携のパートナーをもっともつとつていきたいと思います。

そうした活動の大きな輪を築く上ではやはり学校という存在は重要です。すでに公民館活動など、従来の枠組みでの生涯教育的な組織との連携は少しずつ進み始めていますが、さらに学校が加われば、学びの場のネットワークは、すばらしい場の力を発揮するでしょう。

兵庫県 人と自然の博物館 (通称・ひとはく)  
兵庫県三田市弥生が丘6丁目  
tel. 079-559-2001  
http://www.nat-museum.sanda.hyogo.jp/

たはら なおき  
1953年、福岡県大牟田市生まれ。大学を卒業して建築会社に就職後、青年海外協力隊に参加してアフリカ・マラウイ共和国で国家住宅公団の建設設計に従事する。帰国後、大阪大学大学院で博士号を取得。92年、兵庫県 人と自然の博物館開館にあたり、主任研究員に。96年から兵庫県立大学自然・環境科学研究所教授。専門分野は環境計画・都市計画。主な著書に『神々と生きる村 - 王宮の都市』(学芸出版社、共編著)『自然環境ウォッチング - 六甲山』(神戸新聞総合出版センター、共著)などがある。

# 法然院&森のセンター 自然観察会や イベントなどに 境内を開放

千葉 美津芳  
ライター



京都の代表的な散策コース、哲学の道から一本山側に入った道筋にひっそりとたたずむ法然院。春秋の観光シーズンともなれば、大勢の参拝客が訪れる有名寺院であるが、境内を自然観察会やコンサートなどの会場として提供する「開かれたお寺」としても知られている。住職である梶田真章さんは、どんな考えからこうした活動の場としてお寺を開放するようになったのだろうか。

## ムササビが生息する山で環境学習

京都東山の山すそ、鹿ヶ谷の深い緑に囲まれた法然院は、浄土宗の開祖・法然が草庵を営んだという場所に、江戸時代初期に建立された由緒あるお寺だ。東山三十六峰の一つ、善気山のほとんどが寺域に含まれるという広大な境内を持つ。ムササビやフクロウが生息し、イノシシやタヌキも姿を見せるというその豊かな自然を舞台に、法然院では1985年から市民と二人三脚で「法然院森の教室」という自然観察会を開いてきた。89年には1年間の会員制で「森の子クラブ」を発足。小学生を対象とした季節ごとの自然観察会や合宿を行っている。また、93年には山門の向かいに「法然院森のセンター(共生堂)」を建設するとともに、環境学習市民グループ「フィールドソサイエティ」を立ち上げた。

「森のセンター」は、「フィールドソサイエティ」などの活動拠点。森の生き物を紹介する常設展示を行うとともに、ワークショップで押し花や染め物、陶芸といったさまざまな体験プログラムを企画

したり、京都を訪れる「エコ修学旅行」や地元の小中学校が実施する環境学習の受け入れなどを行っている。

## コンサートや個展の会場として

一方、お寺の本堂や講堂は、アーティストなどの発表の場として提供。毎週のようにコンサートや個展、各種講座やシンポジウムなどが開かれている。こうしたイベントは、法然院サンガ(サンガとはサンスクリット語で共同体の意味)の名のもとで行われ、だれもが自由に参加することができる。

インタビューに訪れた12月15日は、シリーズで行われている「お寺で楽しく考古学」という講座が開かれていた。この日のテーマは「迷走する邪馬台国論争」。大学教授を講師に招き、畿内に邪馬台国があったとする学説の問題点を検証する講義が行われた。

夜7時、三々五々集まってきた参加者で、本坊に並べられた椅子とテーブルはほぼ満席となった。講義中は真剣にノートを取っている人がほとんどだ。講義終了後も熱心な質疑応答が繰り返され、予定時間の2時間を15分オーバーして、ようやくお開きになるなど、非常に熱のこもった催しとなった。

## 思い通りにならないのも自然

また、努力することは大切ですが、努力すれば必ず実現できると現代人は思いすぎています。生きることがしんどくなる理由もそこにあります。もちろん、努力なしでは何事も達成されませんが、努力してもうまくいかないこともあるのが世の中です。そのことにある程度気がついていければ、日常生活でもそれほど落ち込みすぎることはないように思います。お寺に来ていただく、そうしたことに自然に気づいていただけるのではないのでしょうか。

「森の子クラブ」の環境学習プログラムで子どもさんに学んでいただきたいのも、そういうことです。「ムササビ観察会」を例に話しますと、法然院の境内に来て5時頃から1時間ぐらい居たら、たいていは見られますが、やはり自然のことですから、見られないこともあります。でもそれがいいわけです。スイッチを入れてチャンネルを変えるように、いつでも見られると、そこからは自然を学べません。思い通りに行かないということを学ぶのも大切な教育なのです。

しかし、親は何とかがして見せてやりたいと思うので、無理をします。たとえば、ホタルがいらないのなら先に放しておく。

## 人との出会いと体験が たくましく生きてゆく力を育む

インタビュー 聞き手/中間 真一  
梶田 真章さん 法然院住職

「ふるさと」に代わる拠り所

法然院は最初は修行道場として出発したわけですが、明治以降は普通の檀那寺として、檀家に対する法事を行うことにより維持されてきました。しかし、場所的にも、お寺の規模としても、檀家以外の人が参拝に來たり、ご近所の方が散策に來ることが普通にあったわけでは、いろいろな方が、自分の人生の中に法然院という場を何がしか入れて、意味を



持たせたいと思っていらっしやるのであれば、それに応えるのがお寺のあり方だと思っております。

元來、お寺は学びや遊び、やすらぎなど、いろいろな役割を担ってききました。ところが、日本の近代化とともに、そうしたものがお寺以外でももたらされるようになり、お寺には法事や現世利益の享受以外、期待されなくなってしまうました。現代に生きていると、次々と新しいことを要求されます。私たちは新しいことが好きだし、それを求めることは喜びでもあるのですが、一方ではストレスになることも多い。しかし、お寺は何百年とそこに存在し、毎年同じことを繰り返しています。そういう場であるから「そ、お寺に來ることがやすらぎにつながるのではないかと思うのです。そういう、日本人にとって「ふるさと」に代わる拠り所となるのが、お寺にとって大事な働きになると思っています。



ですから、ここに来たら10分、15分で帰るのではなく、1時間、2時間と居て、普段とは違う時間の流れを感じていただきたい。そのためのきっかけがコンサートであり、個展やさまざまな講座なのです。

ただ音楽を聴いただけだったら、わざわざお寺に來ないのではないのでしょうか。お寺にいらっしやるということは、みなさん、何かコンサートホールにはない感覚を味わいに來られている。そういう、この場を大事に思っみなさんが集まっている。さらに言えば、人だけでなく、さまざまな生き物の命の営みが凝縮された場に身を置くことにより、さまざまな命に支えられて生きているというところを感じ、それがやすらぎにつながっているのではないかと思うのです。それは、「共に生きる」ということにもつながります。

しかし、世の中はそうそう自分の都合のいいようにはなっていません。社会に出たとき途方にくれるのは、そんなふうに育てられた子どもたちです。子に良かれと思ってやっていることが、その子の将来を考えるとまったく良くはないわけです。

### 自然観察を通して人間社会も学ぶ

自然というのは、目に見えるものだけでなく、木があって、獣がいて、自分がいて……というように、生きているものすべてが複雑にからみあっています。そ



ら、と考えています。

このことに関連して、個性を育むという話も出てきます。個性というものは無理に育て上げるものではなく、自然に生まれてくるものです。人と出会い、周りとの関係しあうことによって、受け取る側が知らず知らずのうちに取捨選択し、それが個性となっていく。

たとえば、先生が同じことを話しても、受け取り方はみな違います。ですから、無理に個性を育てようとは思わないことです。これだけは知っておいてほしいと思うことを子どもに伝えさえすれば、後はそれぞれが大事だと思つたことを自然に取り入れ、それが個性につながっていく。大人が最初から「この子にはこれだ」と決めつけず、大切だと思つたことをすべて与えていけば、個性というものは自然に育つのではないかと思います。

### ときには厳しさに出会う体験も

「生きる力」とは、一言でいって、「体験」でしょう。人間として最低限知っておいたほうが良いということや学ぶのが教育なのでしょうが、それ以上に力になるのは、子どもの頃に、打ちのめされない程度に打たれておくことです。そして、人間の残酷な面、ひどい面を知って

うという関係性を全体として学ぶことが重要です。木を切れば、こんな影響が生まれ出す」というように、一見関係ないと思えることが、実は複雑に関係しあって存在している。そうしたことを観察を通して学ぼうとしているのです。

また、「ここでは人間社会のことも学ぶことができます。森の子クラブ」にはいろいろな学年の子が集まっています。年の違つ子がいっしょに遊ぶのは、昔は普通にあつたことですが、最近はそうでもありません。子ども同士、同じことを言つてもそれぞれ反応が違いますから、自然観察を通して人間観察もできるわけです。

周りの命と向き合つたときの子どもの感性というのは、20年経つてもそんなに変わっていないと思います。きつかけさえつくとあげれば、生き物に接するとは決して嫌いじゃないし、好奇心も旺盛です。

昔なら普通に接することができた自然がだんだん遠いものになっていますから、いかにしてそうした場に連れ出すかが大切です。子どもときに自然や生き物に触れないと、大人になつたときに大きな違いが出てくるように思います。たとえば、命に対する見方などがそうです。極端にいうと、私たちが予想もしな

おく必要がある。もちろん一方では、人間の優しさや温かさに触れる必要がありますが、優しさばかりでなく、ときには厳しさに出会うことが大切です。昔の人のほうが「生きる力」があつたのは、人間のそうした部分に触れることが多かったからでしょう。

それと、いまはなんとなく暮らしてしまつ時代ですが、自分なりにこだわりたつことを見つけることでしょうか。自分が大事だと思つたことがあれば、それで生きていくことができます。貧しくても、何かやりたいことが見つかるのが一番の幸せですからね。

現代の日本は豊かであるがゆえに、それを見つけないで生きられるというしんどさがあります。そうした中、いかに自分なりにこだわりたいものを見つけていくか。それには、子どもときにいるような体験をしたほうが良い。多くの人間に出会い、人間の本当の姿を見て育つことが大切です。大人の、つくりださなない姿を見て、それを体験として育てていけば、たくましく生きていく力が備わると思います。

しかし、親の優しさがそうさせないのも現代です。危険な目に遭わせない、ひどい人に会わせないことを優先さたと取り違えている。結果として、それが子ど

かつたような事件 人の命を命と思わないような子どもが出てきたり、子どもに対する虐待など が起きているのも、人間の生活が自然とあまりにもかけ離れて、内なる自然、すなわち心が壊れてしまったことに原因があるような気がします。

### 学校で学ぶこと、地域で育つこと

学校では勉強すること以上に、同年代の子どもたちに出会うことに意味があります。では、地域では何を学ぶかという、いろいろな大人がいて、みんながいっしょに社会をつくっているということに、子どもなりに気づいてもらうことです。そしてそこで、自分がなりたいと思う大人に出会えること。それが、学校以外の学びの場における役割ではないでしょうか。

たとえば、アーティストたちが楽しく活動している姿を見ることで、大人社会に対する肯定的な感情が生まれまます。また、そうした場では、自分の親であつても、家庭では見ることでできない違つた面を見られるかもしれません。そういう姿を見て、「大人になるのも悪いことじゃないな」と子どもは思うわけですから。そんな出会いの場をつくっていった

もを弱い大人に育てているように思えます。もつとも、いまの20代、30代の若い親がそう育ってきた世代ですから、仕方がないことかもしれません。

### 貧しかった日本も知っている者の使命

私自身も含め、40代、50代の親がいまの世の中になぜ危機感を抱くかという、単純にいってしまえば、高度成長期以前の貧しい時代の日本を知っているからです。こんなに物があふれていなくても結構幸せだったということや、体験的に知っています。

そついつ昭和40年代が少しでも記憶にあるような私たちの世代だと、最近の子どもを育て方はおかしいと、みな感じているのではないのでしょうか。

最近では、いろいろな事件が起こっていますが、決してそれは特別な地域の特別な関係の中で起こつたことではなく、いつ私たちの隣で起こつてもおかしくありません。そうした社会を私たちはつくり上げてしまったんです。それに気づき、いかにわがこととして受けとめていくか。すぐには変わらないかもしれませんが、10年後、20年後のことを考えて、地道にこうした活動を続けていくしかないと思つています。



法然院  
京都市左京区鹿ヶ谷御所ノ段町 30 番地  
(JR 京都駅から市バス「浄土寺」下車徒歩 10 分)  
tel.075-771-2420  
http://www.honen-in.jp/

かじた しんしょう  
1956 年 9 月、浄土宗大本山・黒谷金戒光明寺の塔頭、常光院に生まれる。大阪外国語大学ドイツ語学科卒。84 年、父の後を継ぎ、法然院の住職に。85 年から境内の自然を活かして「法然院森の教室」を始める。93 年、「法然院森のセンター(共生堂)」を建設し、自然環境と親しむ活動を行う市民グループ「フィールドソサイエティー」顧問に就任。京都市景観・まちづくりセンター評議員、京都芸術センター運営委員、きょうとNPOセンター副理事長なども務める。

# 金沢 21 世紀美術館 自由に回遊できる 開放感あふれる ミュージアム

三浦 彩子  
HRI 社会研究部



2004年10月、金沢市に新しい市立美術館が誕生した。その名は「金沢 21 世紀美術館」。国内外の同時代の作品を所蔵し展示する、現代美術専門の美術館である。この美術館では、市内のすべての小中学校の生徒を対象にしたプロジェクトが進行中だという。この新しい美術館で、子どもたちはどのように現代美術と遭遇するのだろうか。



写真提供・金沢 21 世紀美術館

円くて透明、周囲に溶け込む

金沢 21 世紀美術館は、金沢駅からバスに乗ること 5 分、繁華街から坂を少し上った緑深い一角に位置している。

美術館に近づくと、まずその外観に驚かされる。円形、平屋、ガラス張り。平たい円盤のような外観である。円形なので、建物に正面や裏側という区別がない。また、市道と美術館の境目に、階段や壁などが一切なく、ただ一面の芝生が



あるだけなので、芝生を降りていくと、そのままずっと美術館に入っていけるような雰囲気がある。

外壁が総ガラス張りのため、館内は陽光が存分に入り、とても明るい。廊下の壁も透明アクリルが多用されていて、見通しが良く、閉塞感や圧迫感はほとんど感じられない。

「見学」と「つより」「回遊」

展示室は全部で 14 室、円形の敷地内にはばらばらに配置され、そこを縦横無尽に廊下が走っている。そのため館内に決まった「順路」というものは存在せず、来館者は好きな順番で、部屋から部屋へと渡り歩くことになる。それは「見学」というより「回遊」という感覚に近い。

展示されている美術作品は、絵画、写真、映像、インスタレーションなど多岐に渡る。中でも、仰向けに寝て鑑賞するもの、触れてみるもの、中に入ってみるものなど、参加型・体験型の作品が多いのも特徴であろう。

この美術館では、現在「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」が進行中だ。それに伴い、平日はほぼ毎日、小中学生の団体客が訪れている。このプロジェクトは、具体的にはどのようなものなの

うか。

ミュージアム・クルーズ・プロジェクト

「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」とは、金沢市内のすべての小中学校（私立・国立を含む）の生徒、約 4 万人を対象にした見学プログラム。各学校は、学校ごとに定められた日に来館し、美術館を見学することが定められている。「定められている」と書いたのは、このプロジェクトが、金沢市教育委員会との共同事業であり、教育委員会の号令によって行われているからである。したがって、金沢市内の小中学校の生徒は（病欠でもしれない限り）全員がこの期間に美術館を見学することになる。

自由な巡回で、のびのびと

子どもたちは、美術館に着くと、いったん美術館内のホワイエに集まり、美術鑑賞のマナー（触らない・大声を出さない・走らない）について説明を受ける。その後は、集合時刻まで 90 分間、自由行動。少人数のグループに分かれて、館内を自由に見学する。

この子どもたちのガイドを務めるのが、事前に研修を受けたボランティアの人々

「クルーズ・クルー」（通称：くるくる）だ。この「クルーズ・クルー」たちは、子どもたちの見学にいつしよについて回ることはしない。それぞれ担当の場所に立ち、そこを訪れる子どもたちに、その場所に適したガイドを行う。いわば「同伴型」ではなく「待ち受け型」のガイドである。

そのため、子どもたちは自分たちのペースで、好きなところを見て回ることができる。すると、どうしても「漏れ」が生じて、見ない作品や訪れない展示室も発生するが、自由に休憩しながら見ることができると、疲れにくいようだ。また、「次はどこに行く?」「ここは見たよ」「じゃ、あっちに行こう」などと言いがら、部屋から部屋へ巡り歩く様子は、のびのびしていて、いかにも楽しそうだった。

「クルーズ・クルー」のガイドにはマニュアルがなく、そのクルー個人の裁量にある程度任せられているという。確かに、ストレートに感想を尋ねる人、自分の意見を話す人、作品に関するクイズを出す人、などなど、人によってガイドの仕方はかなり異なる。しかし、この美術館が好きでガイドを心から楽しんでいる、という明るいパワーは共通していて、それが美術館全体に広がり、子どもたちを活気づけていた。



# 美術に接することで養われる力は よりよく生きる上で支えになる

このミュージアム・クルーズ・プロジェクトは、希望校だけではなく、すべての小中学校の生徒全員を呼ぶという点で、非常にユニークなプロジェクトだと思っておりますが、そのあたりについて何か動機があれば教えてください。

とにかく、市内の子どもたち全員に、来てほしいと思いました。

個人的には、美術との関わり方は、人それぞれでいいと思っています。美術館には、行きたい人が行けばいいし、美術を深く味わうには、大勢ではなく一人で見たほうがいいとも思います。

しかし、美術館に一度も行ったことがない、美術館を知らない、というのであれば話は別です。まずは一度来て、美術館のことを知ってほしい。

それに、「この町の小中学校の生徒は、全員、この美術館を訪れたことがある」という状況が実現すれば、今後一般向けのプログラムを企画する上でも違った波

及効果が現れてくると思います。これは一つの社会実験でもあります。

教育委員会との共同作業というのは、最初から決めていらしたのですか？

子どもが美術館に行くか否か、というのは、親の影響によるところが大きいのですが、学校単位で呼べば、親の関心にかかわらず、全員に来てもらうことができる。そう考えて、市の教育委員会と学校単位で見学プログラムを実施することについて話したところ、「普通に募集したら20校希望があればいいほうだろう」と言われました。

しかし、「子どもを全員呼びたい」と考えている人は、教育委員会にも、美術館内部にも少なくなかった。「子どもを全員呼び」ことの意義は、とてもシンプルで分かりやすいものです。だれに対しても、その有効性を説明しやすい。そこで、教育委員会からの命令発動という形で行うこととなりました。

できることなら、子どもたちには「あれを見たい」というように、自分から進んで参加してほしいですね。美術館を自分のものとしてとらえてほしいです。

## サブイバルを支えるもの

最近はいわゆる「実学」に重きが置かれ、美術のような領域は、余裕がある人のものとして、教育的効果とは切り離されて語られることが多いように思います。黒沢さん自身は、美術を見ることによって得られるもの、養われるものについてどのようにお考えでしょうか？

美術作品というものは、すべて何らかの「行為のあと」です。美術作品を見ることは、その「行為のあと」から、作りの「思い」をくみ取ったり、その「行為」や「経緯」を新たに読み解くことです。それは感受性の拡大につながる。そうした経験が、その人にとって、のちのち大きな力となるはずです。

もちろん「行為のあと」であるのは、美術作品だけに限りません。「机」や「オートバイ」などもそうです。しかし、美術作品には、人間の愛憎、生死、存在などにかかわるぶん、ある種の「深さ」があります。中には、人間の残酷さや非常に「悪」なものであつた表現もあるかも

このミュージアム・クルーズ・プロジェクトに対して、学校側の反応はいかがでしたか？

半年前に1カ月かけて、市内の小中学校をすべて訪問し、「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」の趣旨について説明しました。大賛成という学校もありましたが、消極的・批判的な態度を示す学校も少なくありませんでした。学校側の懸念は、主に「移動の大変さ」、教育的効果への疑問、「安全やマナー」に対する不安、この3つに集約されます。

美術館にとつても、このプロジェクトによるリスクは少なくありません。「触るな」と言った矢先にわざと触る子どももいて、作品の保護という点でリスクがあります。一般のお客さんに「うるさい」とお叱りを受けることもあります。はいやいだ子どもが転んだりぶつかったりして、けがをする可能性もあります。

ですから、このような事故が起こらないような雰囲気をごのようにつくり出せるのか、が重要な課題だと思っています。後は、学校の先生方のモチベーションを上げていくような、先生方をサポートするしくみもつくっていききたいと思っています。

子どもたちには、どのように見てもらいたいですか？

大きな支えになるものだと思います。

\*

黒沢さんのお話をうかがって、美術館を歩いていると、美術館の建築的な特徴が、彼の話とリンクしているように思えてくる。

子ども全員に美術館を知ってほしい、自ら進んで見てもらいたいという思いは、市道と館の境目がいまいちな外装（敷居の低さ）、館内を自由に回遊することを可能にした「円形」の構造とリンクしている。

「円形」は、外側へ拡散する遠心力と、内側へ向かう求心力、その両方を秘める形態であるという。くるくると館内を回りながら、その磁場に居ることをひしひしと感じた1日だった。

金沢 21 世紀美術館（通称・まるびい）  
石川県金沢市広坂 1 - 2 - 1  
（金沢駅よりバス「香林坊」下車）  
tel.076-220-2800  
http://www.kanazawa21.jp/

ミュージアム・クルーズ・プロジェクト  
期間：2004年11月～2005年3月  
時間：午前の部（主に小学校）9:30～11:30  
午後の部（主に中学校）13:30～15:30  
対象：金沢市内の小中学校に通う児童・生徒（約4万人）  
会場：金沢21世紀美術館（全館使用）  
主催：金沢21世紀美術館、金沢市教育委員会

くろさわ しん  
1959年12月生まれ。金沢21世紀美術館エデュケーター。「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」仕掛け人。東京造形大学絵画科卒業後、東京芸術大学大学院美術研究科修了。1989年、「水戸芸術館現代美術センター（茨城県水戸市）」の立ち上げに参画。さまざまなジャンルを横断した企画・イベントを数多く企画し、日本の現代美術界に新風を吹き込んだ。97年、同美術館を退職。東京に戻り約1年間フリーランスのキュレーターとしていくつもの企画を手がけた後、99年、「金沢21世紀美術館」のエデュケーターとして就任。

